

| | |
|------------------|---|
| Title | A・J・ヘッセルの生涯およびその中心的神学思想の概観：講演「ヘッセルの思想について」の要旨と若干の敷衍 |
| Author(s) | 森泉, 弘次 |
| Citation | 聖学院大学総合研究所紀要, No. 45 |
| URL | http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2010 |
| Rights | |

聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

A・J・ヘッシエルの生涯およびその中心的神学思想の概観

——講演「ヘッシエルの思想について」の要旨と若干の敷衍——

森 泉 弘 次

第一部 ヘッシエルはどういう人か

(一) 家族関係および(ユダヤ)思想的背景——東欧ハシディズムの指導的ラビの系譜

詩人アルテユール・ランボーが「わたしは一人の他者である」⁽¹⁾と云い、ヘッシエル自身が「自己の本質は非自己であるところに在る」⁽²⁾と看破したように、人間は根本的には創造者、救済者なる神によつて、具体的には自分が帰属する家族、共同体、および祖国の歴史によつて、いわば個人の主観から見れば他者によつて根本的に規定されて誕生し、生育していく。ヘッシエルも例外ではない。彼の父はポーランドのハシディズム派のラビ、母も同じく同派のラビを父に持つ女性だった。父方の祖父はハシディズムの創始者バアル・シエム・トヴ(一六九八—一七六〇)の再来と言われたほどの傑出した義人(ツァディク)だった。先祖の一人、ヘッシエルと同名のラビはバアル・シエム・トヴ死後同派の指導的ラビ、すなわちラヴとなった人である。母方の伯父アルタ・イスラエル・シモン・パロウは聖書の敬虔の鑑のよう

な人で、ヘッシェル七歳のとき父が病死して以後、事実上彼の精神的父として絶大な影響を及ぼした。ヘッシェルは幼い頃からこの伯父を敬愛し、その一挙手一投足をまねびつつ成長した。⁽³⁾未開社会の多くで母方交叉イトコ婚(母の兄弟の娘との婚姻)が行われており、その関連で男子にとつて母方の伯父が父以上の權威を持つ風習を世界の多くの諸民族が有していたことが、文化人類学者によつて明らかにされている。⁽⁴⁾前記母方の伯父アルタ・イスラエル・シモン・パロウは娘の一人をヘッシェルに嫁がせること(母方交叉イトコ婚)を望んでいたが、息子の早すぎる結婚を憂いた母親の反対で、実現しなかつた。ヘッシェルが(親類筋ではない)優れたピアニスト、シルヴィアと結婚したのは、米国亡命後の一九四六年三十九歳のときだつた。ヘッシェルには一人の兄と四人の姉がいた。兄はラビとなり、一番上の姉はラビに嫁いだ。

(2) 少年期と青年期、および歴史的状況——ナチスの台頭・奪権(一九三三)・ホロコーストとの連関を念頭において(母と三人の姉が犠牲となる)

A 少年期と青年期(学習と研究に焦点をおいて)

ヘッシェルは幼少期から将来東欧ハシディズムの命運を背負つて立つべき運命を負つた人として、家族と共にする一日二度あるいは三度の祈り(「礼拝」とも言われる)、トーラー(モーセ五書)、中世屈指のトーラー注解者ラシの申命記注解、タルムード、ミドラシユ等のユダヤ教典のコンスタントかつ集中的学習のうちに成長した。十四歳頃のヘッシェルは十一世紀初期のトーラーとタルムードの注解書および中世最大のユダヤ教哲学者モーゼス・マイモニデスの法典、ミシュネー・トーラーに精通したユダヤ教学者として認められていたと同時に、ワルシャワのユダヤ教学校ではポーランド語、数学、歴史、その他の文系、理系諸科目をも学んだ。思春期にはシュネーアゾーン博士を師として近代

西欧の書物を多読した。やがてリトアニア（レヴィナスの郷土）のヴィルナ市のギムナジウムで正統派ラビ学に触れると同時に近代西欧の哲学、文学、数学、自然科学を学んだ。ドイツ語の学習にも打ち込んで、一九二七年ベルリン大学に入學し、主に近代西欧哲学、ユダヤ教学、（プロテスタント系）聖書学、セム語系古典文献学等を学んだ。フッサールの現象学も学んだらしい。学位論文の主題『預言者の意識』と研究方法（歴史的状况と預言者の言行テクスト即ザツヘ（事象）に注意を集中してそこから意識に映発してくる預言活動（Prophetie）の真理内容を把握し、簡潔に記述する方法）にその深い影響が見られる。

B 歴史的状况（一九一八—一九四五）——第一次大戦後連合国側がドイツに課した過大な賠償金・超インフレとデフレに苦しむドイツ国民のルサンチマンとナチスの台頭

ここで西欧史、特に同時代のドイツ史に焦点をしばって見るならば、⁽⁷⁾第一次大戦がドイツの敗北に終わったのが一九一八年。翌一九一九年ヴェルサイユ条約によつてドイツはすべての海外植民地その他の領地を含め七万二千方キロメートルの土地を失った。勝利側の列強は、二百億金マルクという払いきれぬ巨額の賠償金を課して、ドイツ国民に深い怨念を植え付けた。ナチズム胚胎の絶好の条件が用意されたわけである。⁽⁸⁾同年ヒトラーはドイツ労働者党に加入して間もなく指導権を確立し、二三年クーデターを起こして失敗、翌二四年投獄される。獄中で第一巻を書きあげ、その中でアリア民族を文化創造者として優秀民族、⁽⁹⁾ユダヤ民族を他民族文化に寄生する有害な劣等民族、文化破壊者と規定して排除することを暗示している。因みに日本民族は創造性を欠いた模倣一辺倒の「文化支持者」のカテゴリに分類されている。⁽¹¹⁾戦後ドイツは賠償金の支払いとインフレに苦しみつつも工業生産力を徐々に高めていくが、大恐慌の起こる一九二九年、ドイツに短期外資を投下していた諸国がアメリカの投機熱に刺激されて外資を引き上げたため金融難に陥り、失業者が増大した。この年の十月世界経済恐慌の発生（一八五七年の最初の世界恐慌から数えて八回

目)によつて、ドイツ経済は破綻に瀕し、一九三三年ナチスは全権委任法案の成立強行によつて独裁権の確立に成功する。一九三五年のニュールンベルク法はユダヤ人からすべての法律上の保護を奪い、一九三八年十一月の大虐殺と第二次大戦中のホロコースト(ヘブライ語でシヨア)への道を敷いた。ヘッシェルは三八年一〇月末フランクフルト市のアパートにいるところを突然ゲシュタポに襲われ、国境外に移送されたが、辛うじて逃走できた。カフカ『審判』の劇的シーンを連想させるような危機だった。しかし「炉の中から取り出された燃えさしきながら」(ゼカリヤ書三章二節)奇跡的に命を救われた。預言者エレミヤに神がかけた言葉「彼ら(敵対者)を怖れるな。わたしが一緒にいてあなたを救い出す」(二章八節)が思い浮かぶ。しかし第二次大戦中のホロコーストでヘッシェルは母と三人の姉の命を失った。

第二次大戦の遠因が、第一次大戦の勝利側である西欧列強の復讐心からする過大な賠償金請求にあること、そしていまなお戦火のやまぬ泥沼イラク戦争(二〇〇八年末現在イラク側死者十万人弱に対し米国側戦死者四千人強)が九・一一同時テロに対するアメリカ国民の復讐心をばねに起こされたことは、示唆的である。人類史最大の問題の一つである戦争の根絶のために、今こそ、ユダヤ出自でユダヤ教の伝統を質的に超えたイエス・キリストの「愛敵の精神」に汲むべき時がきたのではないであらうか。トルストイのそれはいうまでもなく、ガンジーの悪に対する非暴力的抵抗も山上の垂訓に靈感を得て想到されたことは、彼自身の告白から推定される。¹²⁾ボン・ヘッファーやマーティン・ルーサー・キングは彼らの後継者だった。そしてヘッシェルは「イエスの代贖死」という教義は拒否するが、ハーレムのアパートの一室で差別の苦しみにむせび泣く黒人少女を思つて眠れず、キング牧師等と共に公民権運動に立ち上がり、米空軍の絨毯爆撃の犠牲となる無数のベトナム国民の苦しみを思つて、キリスト教神学者ジョン・ベネット等とベトナム反戦運動を組織した点で、ヘッシェルは義と憐みのクロスするイエスの精神に限りなく近づいたユダヤ教神学者であつた。

第二部 対話の哲学者ブーバーと顔貌の哲学者レヴィナスとの差異

ヘッセルは早くから著書を通してブーバーを知っていたが、師弟関係を結んだのはベルリン大学時代に通っていた改革派系のユダヤ教高等学院においてである。ブーバーはハシディズムを西欧に紹介し、ハシディズムから靈感を得て発想した対話の哲学の書『われと汝』（一九二二）で一躍世界的名声を博した哲学者である。しかし彼は基本的にはハスカラ、すなわちユダヤ啓蒙主義の徒であつて、ハシディズムを発見して関連の著作を発表し続けたにもかかわらず、ハシディズムの神髄たる非律法主義的な、全身全霊をもつて慣例遵守を貫く素朴な信仰態度とは無縁の人、原則としてシナゴグでの礼拝に参加しないリベラル・ユダヤ教徒だつた。彼の対話の哲学が西欧と日本の知識層の広範囲に受け入れられた一因は、そこにありそうだ。にもかかわらず、ハシディズムの始祖バアル・シエム・トヴおよび彼の法灯を連綿と継いだラビたちと、正統ラビ的ユダヤ教の律法主義と主知主義によつて遠ざけられたアブラハムの神を自分たちの暮らしに限りなく近づけてくれた彼らを敬慕してやまない無数の庶民信徒との間に起る愛と忍耐と信頼の逸話集を研究して、ユダヤ的信仰の神髄を西欧の人々に紹介し続けたブーバーの功績は、どれほど賞賛してもしすぎることはないと思う。ブーバーのこうした先駆的仕事がなかつたなら、一世代若い弟子のヘッセルの正統ハシディズムの思想の受容はずつと遅れたであらう。ブーバーのハシディズムの真理へのすぐれた洞察力を垣間見せる一例を挙げる。『ユダヤ教論』の一節「ハシディズムの説くところによれば、隣人愛の真の意味は、それがわれわれが果たすべき神命である点にあるのではない、隣人愛をとおして、隣人愛において、われわれが神と出会うということにある。……レビ記一九章一八節の『あなたの隣人を自分のように愛しなさい』という聖句はそこで終わっているのではなく、すぐ後に「わたし

は主である」が続く。……このくだりのハシデイズムの解釈によれば、神は言われる『わたしは遠くにいるとあなたは思っているようだが、そうではない。隣人を愛するとき、あなたはそこにわたしを見いだすのだ』⁽¹³⁾。

レヴィナスはハシデイズムに対する軽蔑を露に示すリトアニアの正統タルムード学派のユダヤ人哲学者である。「われ神よりもトーラーを愛す⁽¹⁴⁾」という言葉は、ハラハー（狭義の律法）と共に、ときにはそれ以上にアガダー（救いの出来事についての証言、物語、譬え、および詩、歌、あるいは格言で表現される啓示、宗教的智恵、敬虔）を評価するヘッシェルとは違う。とはいえ、人間の顔そのものが「汝殺すなかれ」の誠めであるというレヴィナスのユニークな主張は、ハラハー的というよりはむしろアガダー的であろう。彼は言う。「汝殺すなかれの掟が刻まれた「他者の」顔のヴィジョンは、それだけではわれらの欲求を満たしてはくれないし、克服しがたい障害に直面する経験に還元されることもない。にもかかわらず顔のヴィジョンはわれらの権力の前に無防備にさらされている。現実には殺人は可能だからだ。ただし殺人を犯すことができるのは、他者を真正面から見つめることのない場合に限られる」⁽¹⁵⁾。二〇〇八年十月の悲しい事件を思い出す。あの九州の若い母親は、わが子の顔を見詰めながら携帯ストラップでその首を絞めたのであるか？

第三部 ヘッシエルの神学思想の概観

〔一〕驚きの思い——「わたしが祈り求めたのは奇跡ではなく驚きの思いでした」

ヘッシエルは米国では「驚きの思いの哲学者」として知られている。『沈黙の春』の著者レイチェル・カーソン（ユダヤ系のエコロジスト・ライター）の好きな *the sense of wonder* は、おそらくヘッシエルの思想からの発想であろう。一見平凡・陳腐な出来事や現象のうちに神による奇跡を見る信仰の眼、科学の眼である。「リンゴの実が樹から落ちる」ありふれた現象を見て重力の法則を発見したニュートンはその典型的な例であろう。すべてを当たり前と見る見方は、科学はいうまでもなく、信仰の最大の敵だとヘッシエルは考える。

宗教的伝統がわれわれのために用意してくれている宝は数多くあるが、驚きの思いという遺産はその一つである。神の御旨と礼拝の大切さを理解する能力を衰えさせるもつとも確実な方法は、物事を当たり前なこ
ととして受け取る習慣である。生きているという事実の崇高な驚異に対する無関心こそ罪悪の根源である。⁽¹⁶⁾

神を畏れ敬い、その限らない恩寵に感謝する思いが信仰の核心にあると思われるが、ヘッシエルは神への畏敬と感謝に先立って神の創造の業に対する驚きの思いがある、と言うのである。創造の業の結果のもつとも明らかな事実は、わたし自身が生きているということである。自分が生きている、五感を働かせて環境を知覚している、あたかも呼吸をす

るかのように、見聞きするものについて、自分自身について、かかわる他者について考え、判断しているという一見平凡な事実、神の不思議な愛の業を感じて驚き、詩篇の詩人のように、「人の子は何者なのでしょう。(月や無数の星を天に配置された) あなたが顧みてくださるとは！」(八章五節)と、思わず讃嘆の声を発せざるをえない。そこに信仰の原点があるとヘッシエルは考えるのだ。そうした生きているという事実の奇跡性に鈍感になって、長期間無感動的に生きていると、やがて人間はそうした生ける死かばね状態に耐えられなくなり、アルコールや薬物や異常性愛や暴力や投機に刺激と快楽と陶酔を求めようになるのではないであろうか。そうなると人間は万能感の囚われとなって現実が見えなくなり、自己抑制が利かなくなり、一層の快感と陶酔と利益を求めて破滅への進軍を続ける。一八七三年と一九二九年の大恐慌前夜の大バブルの怖さを忘れて、投機に熱狂し続けた揚句に、二〇〇八年六月サブプライム問題を機に発生した八度目の世界大恐慌が、その典型的な一例であろう。驚きの思いを忘れ、感動すべきものに感動できなくなった現代人の寒々とした精神的状況のつげは怖いと思う。

注意すべきは、ヘッシエルにとって「驚く」とは、英語でいう I am surprised (びっくりする) (受動態に注意!)ではなく、I wonder (不思議に思う) (能動態!)である。「われわれは驚くという行為 (deeds of wonder) を通して驚きの感覚 (the sense of wonder) を生きいきと保たねばならない」という言葉に「驚きの哲学者」ヘッシエルの面目が躍如としていると、わたしは思う。

(2) 学習の重要性——「学習は礼拝だった。けっしてゆるがせにしてはならないものだった」⁽¹⁸⁾

ヘッシエルにとって学習がどれほど大切なものであったかを示す例証として、八年前の拙著『幸せが猟犬のように追いかけてくる——A・J・ヘッシエルの生涯と思想』(教文館) 一八ページから引用する。

ヘッシエルは勤勉な少年であった。寸暇を惜しんで勉強した。勤勉を貫き通した。晩年の十年間、社会問題に深いかわりをもつて、反人種差別、反ベトナム戦争その他の運動のために同志とともに奔走していたときも、勉強と祈祷をやめなかった。彼がもつとも憎んだものが、人が同じ人間に対して冷酷な仕打ちをしたり侮辱したりすることであったことはよく知られている（特に公的な場所における侮辱がそうだった）。しかしそうした人間の冷酷さ無神経さにおとらず彼が憎んだものはほかでもない、怠惰であった。英語で「ひまつぶし」をkilling time（時を殺す）と言うが、ひまつぶしをする人間、怠惰な人間は、ヘッシエルによれば時間という神が人間に贈った、そしていまも贈り続けているかけがない生の持続の首を絞めるに等しかったのである⁽¹⁹⁾。

ヘッシエルにとって学習の基本イメージは聖典の反復学習だったであろう。基本テキストは「易しい文章」とは限らない。何回読んでも意味が透明にはならないが、魂の底から惹きつけてやまない、洞察と靈感を与える、どちらかという堅い文章である。そうした意味で、文語訳聖書は反復練習にふさわしい。定年退職後の二〇〇四年に始めた土曜英語教室でわたしは小学生に文語訳と英訳で詩篇やイザヤ書を唱えさせている。彼らはいやがらずに大きな声で教師にならつて朗読する。学校でいじめに遭う生徒にとって、「悪しき人はしからず。風に吹き去るもみがらの如し」というフレーズなど印象深く聞こえるようだ。

ヘッシエルの学問観に決定的な影響を及ぼしたのは、中世ユダヤ教哲学の碩学モーゼス・マイモニデス（一一三五一—一二〇四）であろう。同時代の医学者としても最高の業績を残したマイモニデスにとって「アリストテレスの知識は人

間が所有しうる最高の知識であった」が、しかし「神による啓示を通して預言のレベルに、すなわち存在する最高段階の知識に達したイスラエル預言者」⁽²⁰⁾はアリストテレスを超えていた。マイモニデスにとつてと同様ヘッシエルにとつても、学問と礼拝（祈祷）が切り離せない関係にあつたことはこの一事によつても推測できる。同書においてヘッシエルは「若い頃から人間的知性の限界を自覚していたマイモニデスにとつて）祈りは思惟過程の一要因であり、認識は神の賜物として現れる」と書いている。こうした学問観の真義を明らかにすることは、クリスチャン・スクールの使命の一つかもしれない。

(3) 預言者と神のパトスへの共感——「神に対しては民の側に、民に対しては神の側に立つ」

神学者ヘッシエルがもつとも深い関心を抱き続けたのはイスラエル預言者たちである。彼がベルリン大学に提出した学位論文の主題は「預言者的意識」*Das Prophetische Bewusstsein*（ただし著書として刊行されたときのタイトルは『預言』*Die Prophetie*）⁽²¹⁾だったし、米国に渡つてから書いた大著の一つで、欧米でもつとも広く読まれている著書は『イスラエル預言者』⁽²²⁾だったことから、そのことは明らかである。神のパトスとは、ストア派の哲学やヒンズー教の教典『ウパニシャッド』に見られるような、ロゴス一辺倒の法則的、静態的な神とは違つて、人格的存在であり、ロゴスと共に深い感情性を湛えた、ダイナミックな聖書の神の性質を指す言葉である。旧約聖書では主として人間の性懲りない悪行、残酷、快楽主義に対する神の憤りを指す。預言者はこうした神の怒りとしてのパトスに共感して同胞たちに「神への立ち帰り」を訴える勇氣を持ち、背きの罪に対して呵責ない神の言葉を同胞に伝えずにはいられぬ内的衝迫に動かされる人間である。「主の名を口にすまい、もうその名によつて語るまい、と思つても、主の言葉はわたしの心の中で、骨の中に閉じこめられた熾火のように燃え上がります」（エレミヤ書二〇章九節）というエレミヤの言葉に典型的に示

されているように。同時に神が怒りの鉄槌を民に下そうとするときは、民の肩をもつて「主なる神よ、どうぞ赦してください。ヤコブはどうして立つことができるでしょう。彼は小さい者です」（アモス書七章二節）ととりなすのも預言者である。

黒人に対する無神経な差別の慣習に対して憤激し、公民権運動に冷淡な同胞ユダヤ人が多かった時期に、またユダヤ系アメリカ人を差別側「白人」として白眼視していた黒人の多かった時期に、マーティン・ルーサー・キング牧師と連帯して抗議行動を続けたヘッシエルは真に預言者の人間だったと言えるであろう。⁽²²⁾

(4) 敬虔——「敬虔な人は例外的なものに依存してはいない。靈的なものは平凡な行為が冒険であるということを知っているからだ」

バルトが十九世紀神学一般を「敬虔主義」という言葉で括って、徹底的に批判したことは知られている。彼の著書『ローマ書』には特にそうした批判性が露に表現されている。神の絶対的な聖、知恵、恩寵の前に人間の敬虔や知恵や業や美德や努力や計画性などは無に等しい、人間自身の救済に何の役にも立たない、というのは確かである。ましてや敬虔的感情の自己目的化としての敬虔主義が無に等しいことは、バルトの示唆するように、言うまでもない。とはいえ、バルトが批判するのは敬虔主義であつて敬虔そのものではないことは、彼の『ローマ書』⁽²³⁾を読めば明らかである。バルトは神への信従行為、すなわち神の絶対的恩寵の証言としての、また神の聖、義、愛、善が人間を通して表現されるものとしての、人間の義、愛、善は肯定している。律法と預言者が預言し証言している神の人、イエス・キリストを認めず拒むユダヤ民族の存在が「このように持続したのは、彼らが神の恵みによつて確固として支えられたからなのである」⁽²⁴⁾というバルト自身の言葉にもそのことは明らかである。ヘッシエルの敬虔は、まさしく歴史を通して働いている

神の無償の不思議な業なのです。ヘッシエル自身に「敬虔な人」がどのような人かを語らせよう。

敬虔はそれ自身を超えた何者かを指している。内的生の中で作用しながらも、敬虔は人間を超越したなものかへ、現在の瞬間を超えて行くなにもかへ、見えるものと見えざるものの双方を乗り越えるなにもかへ、われわれを差し向ける。人間が感覚的なものや野心に没頭しようとするのを絶えず妨げつつ、敬虔は利害と欲望よりも、情熱と職業上の出世よりもっと重要ななにもか擁護者として毅然として立っている。世界の美と魅力を否定はしないが、生が広大な地平の下で、個人的生、いや一国の生、一世代の、さらには一時代の生の範囲すら超えて延び広がる地平の下で生起しているということを、敬虔な人間は悟っている。彼の霊的視力は神的なものを指し示すなにもかを看取する。些細なものの中に意義深いものを、平凡なもの、単純なものの中に究極的なものを感得する。……

敬虔な人といえども、圧迫やストレスの甚だしいときはつまずくかもしれない。……しかし聖なるものへの忠誠心が緩むことはあつても、その源泉から離れることはけつしてない。⁽²⁵⁾

前期バルトのように、ヘッシエルは人間と神とを峻別して、人間の側に一切の善性を認めぬ立場はとらない。第二次大戦直前スイスに赴いたヘッシエルはバルトとの接触を試みたが果たせなかつた。ヘッシエルは神学者、牧師として社会的不正、不平等と敢然と戦っているラガーツにむしろ共感を示していたという。⁽²⁶⁾ 彼にとつて敬虔な人とは、上品ぶつた宗教的偽善者どころか、ラガーツのような社会的弱者の救済のために果敢に闘う人を指すのではないか、そんな気がする。

(5) 慣例遵守 (observance) —— 「慣例遵守によって彼は危機を脱することができた」

これは伝統的に定められている一日二回の祈りや金曜夕べのカバラット・シャバット礼拝や安息日礼拝や食餌規定(コシユルト)をきちんと果たすことを意味する。ヘッシエルは慣例遵守の人だった。その意味では保守的なユダヤ教徒である。近代化が進むにつれて慣例遵守はおろそかにされるようになる。ユダヤ教徒も基督教徒もその点では同じだが、比較的にはユダヤ教徒の方が慣例遵守については厳格だと思う。これをキリスト教徒は律法主義の一言で片づけがちだが、慣例遵守がゼロになったら、事実上信仰は維持されないのであろう。危機に直面して精神的に不安が強まったり、憂うつになったりするとき、精神の支えとなるのは意外と慣例遵守である。わたしにも覚えがある。

ヘッシエルも一日二度祈禱書を唱える習慣によって危機から助けられたと、ユダヤ教祈禱論『人間の神探究』⁽²⁷⁾の中で書いている。二〇歳のときヘッシエルは、ベルリン大学に入学するため単身ベルリンに行ったが、この文明の先端を行く大都市でお上りさんの広場恐怖症的心境に陥つたらしく、今後の生活や勉強についての不安に苦しめられ、悶悶とするうち、ふと夕日が沈むのを見て、ここしばらく日々の祈禱の慣例を怠っていたことに気づき、「ほむべきかなわれらの神なる主。御言葉によって夕べの時をもたらず、宇宙世界の王よ……」と、夕べの祈りを唱え始めた。それがすむと口をついて出てきたのは、「すべての山々の頂ぎの彼方に今しも静寂ありき」というゲーテの詩だった。異教徒のゲーテにとって生の神秘は静寂、死、忘却であろうが、ユダヤ教徒にとっては「すべての山々の頂ぎの彼方に神の言葉あり」だと、青年ヘッシエルは思う。こうして彼は平常心をとりもどした。慣例遵守によって彼は精神的危機を乗り越えることができたのである。

(6) ミツヴォット（神命、誠めを意味するミツヴァアの複数形）——その限りなく豊かな含意

A ミツヴォットの特性——五感で知覚できるような具体性を帯びた恵みの誠め

ヘッシエルに言わせれば、ユダヤ教が人類に対してもっとも貢献しうる無比の思想はミツヴォットの思想である。キリスト教徒はとかくユダヤ教というと律法主義と結びつけがちですが、ミツヴォットの源は神がシナイでモーセを通してイスラエルと人類に賜った恵みの誠めである。日に二度もしくは三度の礼拝と週一度の安息日遵守、そして隣人、とくに虐げられている隣人への親切、善き行為、具体的援助であり、それに伴う幸せである。ヘッシエルによれば、ヘブライ語の「ミツヴァア、ミツヴォット」はあたかも五感で知覚できるような具体性がある。「ミツヴォットをそれに充当する」「ミツヴォットを身につける」「ミツヴォットは大切な友達」「それがないと裸も同然の着物」等々の用法がある。²⁸ヘッシエルのようなユダヤ教徒にとって善は生命であり、悪は死である。古代英語では善は good でも god でも表せた。どんなに些細な善行にも神宿る、という暗黙の信仰がその前提にあつたのだと推測される。God はすべての good の源泉と考えられていたのであろう。古代イスラエルから受け継がれたユダヤ教のミツヴォットの思想の背景にもこれに類似した原始的思惟が働いているような気がする。

B インセスト禁忌の普遍性——人間が人間になるために避けて通れぬ掟

神与の律法を至上のものとする点にユダヤ教の本質的特徴の一つがあることに疑問の余地はない。ここで律法あるいは掟が人類にとつて持つ意味について考えてみることは無意義ではないと思う。文化人類学者はすべての民族にインセスト禁忌が普遍的に認められることで一致している。この禁忌の理由については、古来近親結婚からは劣性遺伝が発

現しやすく、比較的心身障害児出生の頻度が高いという生物学的、医学的理由があると推測されてきたが、事柄の性質上調査に困難があるせいであろうか、他世代にわたる厳密な科学的調査に裏付けされた論文は出されていないようである。しかし、常識から考えてみて、こうした厳しい禁忌がどの民族にも見られることは、人間にとって近親姦への誘惑がきわめて強いことが前提されており、そして近親姦が許容され、実行されれば、家庭構造が崩壊して、健やかな育児と正常な親子・きょうだい関係が不可能になり、ある意味で人間が人間になれない事態が生じるのではないかと推測される。レヴィ・ストロースは部族が他部族との社会的共存関係を維持していくために不可欠な「交換」を可能にするために、インセスト禁忌が要請されると考えているようだが、こうした経済人類学的理由の背景には、今わたしが述べたような常識的憂慮があると思われる。

C どうして人類だけが掟を持つようになったのか——E・カッシーラーに学ぶ

人間社会がインセスト禁忌を初めとする多くの掟あるいは律法の体系によって秩序を守られて存続しており、それが万一他の社会集団によって暴力的に破壊されるか、あるいは内部矛盾の激発によって自壊するかしたら、おそらく崩壊は免れないであろう。また律法自体あるいは律法解釈が社会の進展に適合せずそれを阻むようになれば、適正に改革されなければその社会集団は存続が危ぶまれる危機に陥る。こうした過程は歴史に照らして明らかである。ではどうして人類だけがそうした「掟」を持つようになったのであろうか。それは人間が言語、あるいはカッシーラー⁽³⁰⁾の言う意味での象徴（シンボル）によって生きる存在者だからである。もちろん文字が発明されるか以前から言語は存在し、掟はあった。言語によって人類は直接的、即時的な刺激—反応系、環境への直接的適応系（いわゆる本能）を超える象徴的、間接的、遅延的（思考—判断—解釈に媒介された）適応系の次元に入る。厳密に言えば、そのことによって人間は選択の自由、すなわち善と共に悪をもなしうる自由を獲得する。その結果、共同体の安全を守るために掟が必要にな

る。こうして人間は真に（人）類的な存在（フオイエルバッハ）になるわけである。動物界に見られぬ複雑な社会、文化、文明がこうしてつくられてゆく。社会は必然的に他者関係からなり、互いに侵しあわぬよう道徳的秩序が要請される。インセスト禁忌（十戒では第六戒と第十戒に潜在している）を中心とした律法体系の誕生である。歴史的に見て、本当に必要なことは必ず可能となるのである（マルクス）。

D 律法の起源は何か、モーセはなぜ掟を大切にしたのか——トーマス・マン（一八七五—一九五五）に
学ぶ

二十世紀の代表的小説家の一人、トーマス・マンに『掟』（Das Gesetz）という短編小説がある。大長編『ヨゼフとその兄弟たち』を完成してまもない一九四三年春（米国亡命中）に書き上げた小説で、当時ナチスによるユダヤ人殲滅政策が進行中だった。妻はユダヤ人女性だったため生命が脅かされており、彼の兄弟もナチスの犠牲になり、彼自身も自由な作家活動を禁じられていた。それだけに一層、彼は戦争暴力の根底に潜む道徳的秩序の崩壊と再建の問題に強い関心を持たずにはいられなかつたであろう。モーセが奔放なエジプトの王女と質朴なユダヤ人男性奴隷との間に生まれたと仮定するこの短編は、フィクションではあるが、律法の起源の問題について興味深い光を当てている。父はナイル河畔で王女に誘惑されて関係を持った直後に殺されて埋められ、ヤコブの子レヴィの子孫アムラム、ヨケベデ夫妻に育てられる。長じてエジプト宮殿内で教育され、やがて己が胸の内に住む神の召しに従い、隸属状態にある同胞ユダヤ人の解放のために立ち上がり、解放後シナイ山で神から十戒を授かり、石板にそれを刻む。小説冒頭の記述にモーセが律法を何よりも大切にしたりした理由が簡明に記されている。

彼の生まれは無秩序なものであった。だから彼は情熱的に秩序を愛した。犯すべからざるもの、命令や禁

命を愛したのである。

彼は若いときに、逆上して人を殺した。だから彼は、人を殺すのはすばらしいことではあるが、しかし、人を殺したという経験は厭わしい限りだ、人を殺すべきではない、ということ、そうした経験のないだけよりもよく知っていた。

彼は多情であつた。だから精神的な、純粋な、神聖なもの、すなわち目に見えないものを渴望した。……⁽³¹⁾

ここで示唆されているのは、(1)暴力や放蕩は激情や欲望から生みだされること、(2)暴力は、たとえモーセの場合のように正義感から行われる場合でも、倫理的に正当化されえないということ、(3)社会を無秩序への転落から守るために掟あるいは律法はなくてはならないということ、である。

E 偶像崇拜は人間の自己疎外即自己奴隷化であり、自他への暴力性を含意する

掟にはある社会あるいは時代にのみ妥当する派生的なものと、モーセの十戒のような世代を超えた人類普遍の倫理的掟がある。ユダヤ教のコシユルトやイスラムの禁酒などは後者であろう。十戒の第二戒、偶像崇拜の禁止はどうかという問いが出るかもしれない。これは確かに、殺人や姦淫とは違うが、偶像崇拜の本質は人間によって造りだされた物や人間の属性に人間自身が屈服する意味で必然的に自己疎外であり、人間本性に対して搾取性、暴力性を帯びる。それはヘッシエルが示唆しているように⁽³²⁾神による出エジプトの恵みに背く行為、「自分を奴隷として身売りする」に等しい行為だからである。⁽³³⁾

以上、ヘッシエルの所論から離れて律法の起源とその意義一般について論じてきたが、最後に主題に帰り、ヘッシエルのハラハー論に触れて拙論を閉じたいと思う。

F ハラハーとアガダーの相補性の原則

ヘッシエルは、狭義の律法あるいは誠めとしてのハラハー以上に救いの出来事と愛の物語、比喩としてのアガダーを評価したが、しかしハラハーにはアガダーにはない独自の意味、役割、機能があることをわきまえていた。ハラハーとアガダーそれぞれの独自の役割と限界、互いに他を欠いては成立しない両者の相補性について見事に解明した記述を紹介しよう。

……ハラハーは不動のパターンによって己の生活を形づくっていく強靱さを表している。いわば混沌としたものに形式を賦与する力と言えよう。他方アガダーは、しばしばあらゆる制約を超えようとする人間の止むことなき奮闘努力の表現である。ハラハーは生存の合理化、図式化である。定義し、明記し、計量し、限定し、生を厳密なシステムの中に置く。アガダーは神、他の人々、および世界との、言葉で言い表しえぬかわりを扱う。ハラハーは律法を扱い、アガダーは律法の意味を扱う。……ハラハーが日常的行為の実行法を教えてくれるのに対して、アガダーは永遠のドラマに参加する方法を教える。……ハラハーは法令を布告し、アガダーは靈感を吹きこむ。ハラハーとアガダーの相互関係こそユダヤ教の本質である。アガダーなきハラハーは死んでおり、ハラハーなきアガダーは荒れ狂っている⁽³⁴⁾。

この引用の最後の数行に、ユダヤ教神学者ヘッシエルの真骨頂が表れていると思うのはわたしだけであろうか。「アガダーなきハラハーは死んでおり、ハラハーなきアガダーは荒れ狂っている」。トーマスマンの『ヨーゼフとその兄弟たち』と『掟』の二作を貫いているのも同じ直観、ヴィジョンではなかつたであろうか。

ハラハーとアガダーがそれぞれの独自性を貫きつつ一体となって働くダイナミックスがヘッシエルの神学であり、レヴィナスの依拠するラビ的ユダヤ教から距離をとり、ハシディズムの神髄に近付きつつ、なおハスカラ（ユダヤ啓蒙主義）の残渣を留めるブーバーのそれとも一線を画す独自のユダヤ教観である。

ヘッシエルにとって神がモーセを通してイスラエルに、そしてイスラエルを通して人類に十戒を授けたシナイの出来事（アガダー）は、一回限り起こった出来事ではない。個人として、共同体として、社会としてのわれわれの置かれた状況において、不断に生起している出来事である。「石造の記念碑はいずれ消え去る運命にある。だが霊に刻まれた日々（アガダー）は決して過ぎ去ることはない。……律法が神から授与された日は決して過去とはならない。その日はまさしく今日なのであり、毎日なのである」⁽⁴⁵⁾。以上の言葉から、ヘッシエルがアガダーとの関連でハラハー、すなわち律法をどれほど重要視しているかは明らかである。それは何よりも隷属からの、自己疎外からの解放の宣言であり、「自由に生きよ」という命令法である。それは自由が放蕩無頼に、救いようのない利己主義に、自他への暴力性に、隣人の不幸への無関心に墮することがないために、個人が、共同体が、社会が心して守るべき恵みの誠めだったのである。

結 論

ヘッシエルの生涯とその思想を調べ究めることによって明らかになってきたことは、これまでわれわれキリスト者が、新約聖書に登場するフアリサイ人をモデルにした律法主義的ユダヤ教観では見えなかった、ある意味で神への愛を

人間への愛を通して実践した、またそうした愛の実践を通して神の底知れぬ無償の愛を啓示したイエス・キリストの精神、生き方に一脉通うものがユダヤ教に存在しているということである。もちろん神の前に人類の背きの罪即隣人の不幸に対する無関心、冷酷さを負って贖罪の死を遂げたイエスのうちにメシアを見出さないヘッシェルの思想がユダヤ教の限界内に留まることは正直に認めなければならない。しかしその限界内から、生涯を通して彼が身をもって説き続けた聖書の真理の数々は、これまで気付かなかつたわれわれ自身の（特にユダヤ教に対する）偏見、非寛容、限界を気づかせてくれるであろう。特に彼のミツヴォットの思想とハラハーとアガダーの相補性の原則の思想はわれわれが学ぶべき多くの真理をはらんでいると信じる。

ここで改めてミツヴォットとハラハーとの関係を問うてみるならば、ハラハー（狭義の律法）とアガダー（救済の出来事および救済史）が後者優位に調和的に働き合うときの微妙な感覚をユダヤ教徒はミツヴォットと呼んでいるのではないであろうか。繰り返すが、ミツヴォットの思想の妙味は、英語史的に言えば、すべて good なものは God から到来するという信仰にある。心をこめてする家事や日々の職務や小さな親切や議員選挙の投票行動やボランティア地域奉仕など、そして家族と滋養ある粗食をおいしく味わい、好きな歌を歌い、好きな音楽家のコンサートに行き、年寄りと子供と障害者を大切にする。それらすべてにおいて神が介入し、助力し、導いてくれる。そのことに気付かせてくれるのが、ほかならぬ安息日、聖日の礼拝遵守の誠めである。こうした平凡な日常性の祝福を感じ取る感覚をとりもどすのにヘッシェルの思想は助けになると思う。

注

- (1) 一八七一年五月二五日付けジョルジュ・イザンバール宛書簡、いわゆる「見者の書簡」、*Rimbaud, Œuvres, Classic Garnier, 1991, p.35.*
- (2) 拙訳ヘッシエル『人は独りではない』教文館、一九九八年、五五ページ(原著 *Man Is Not Alone* の初版は一九五一年 Farrar, Straus and Giroux から出た)。
- (3) 拙著『幸せが獵犬のように追いかけてくる——エイブラハム・ジョシュア・ヘッシエルの生涯と思想』教文館、一一二〇ページ参照。
- (4) レヴィ・ストロース『親族の構造』福井和美訳、青弓社、二〇〇〇年、四六九、五一三、五一六一八、七〇六、七一一三ページ参照。
- (5) ラビ・シュローモ・イツァーキ(一〇四〇—一一〇五)、中世屈指のユダヤ教聖書注解者。北フランスに生まれ、生涯の大半をそこで過ごした。ぶどう栽培で生活費を稼ぎつつ、青年時代アシケナズイーの霊的父と称えられたマツイエンスに師事した後、聖書注解と弟子の養成に献身した。注解書の範例とされる申命記注解をヘッシエルは暗唱できるほど愛読した。
- (6) マイモニデスの生涯と思想については、ヘッシエルが二十八歳のとき(一九三五年)ドイツ語で書いた *Maimonides: Eine Biographie*、拙訳『マイモニデス伝』教文館、二〇〇六年に詳しい。
- (7) 以下の歴史的記述は主として山川出版社、世界各国史シリーズⅢ、林健太郎編『ドイツ史』一九五六年、第七、八章に拠る。
- (8) 筆者の怨念(ルサンチマン)の概念の理解は、白水社版、林田新二他訳、マックス・シェラー著作集第四卷『価値の転倒』上(復刊版二〇〇二年、原著刊一九一五年)五一—六九ページ、および Rollo May, *Man for Himself* (1953) Chap.5

Freedom and Inner Strength の Hatred and Resentment as the Price of Denied Freedom の項に拠っている。

- (9) 角川文庫版、平野一郎他訳『わが闘争』上、四一三ページ参照。
- (10) 同上書四三三―三三五参照。
- (11) 同上書四一四―一五ページ参照。
- (12) 中央公論社版、世界の名著第六十三巻所収、蠟山芳郎訳『ガンジー自叙伝』一二八―二九ページ参照。徹底した非暴力キリスト者、トルストイからの影響は言うまでもない。同書一六〇ページ参照。
- (13) M. Buber, *On Judaism*, ed. by N. N. Glatzer, Schocken, paper ed. 1972, p.212.
- (14) エマヌエル・レヴィナス『困難な自由』内田樹訳、国文社、一九八五年、一六四ページ以下参照(原書は一九六三年刊)。
- (15) 同上書一九ページ。ただし訳文は引用者が手直ししてある。
- (16) 拙訳『人間を探し求める神』教文館、一九九八年、六四ページ(原著 *God In Search Of Man* は一九五二年 Farrar, Straus and Giroux より刊行)。
- (17) 同上書四二八ページ。
- (18) Edward K. Kaplan and Samuel H. Dresner, *Abraham Joshua Heschel*, Yale Univ. 1998, p.25.
- (19) ヘッシェルの時間論については拙訳『シャバット——安息日の現代的意味』教文館、二〇〇二年に詳しい。原著 *The Sabbath* の初版は一九五一年刊。
- (20) 拙訳『マイモニデス伝』三七ページ。注(6)参照。
- (21) *The Prophets*, Harper, 1962. 邦訳上下巻教文館、一九九二。
- (22) ヘッシェルの公民権回復運動へのアンガージュマンについては、Edward K. Kaplan, *Spiritual Radical—Abraham Joshua Heschel in America 1940-1972*, Yale Univ. 2007, pp.215-225 参照。
- (23) 初版一九一九年、改定増補版一九三二年、小川圭治他訳『ローマ書講解』上下巻、平凡社ライブラリー。
- (24) 新教出版社版、カールバルト著作集第七巻、二八六ページ。
- (25) 拙訳『人は独りではない』二八九―二九二ページ。
- (26) E. K. Kaplan and S. H. Dresner, *Ibid.*, p.272.

- (27) *Man's Quest For God*, Scribners, 1954, pp.96-97.
- (28) ヘッシエル『人間を探し求める神』四四四ページ参照。
- (29) レヴィーストロース『親族の構造』第二章「インセスト問題」参照。
- (30) カッシーラー『人間——この象徴を操るもの——』宮城音弥訳、岩波書店、一九五三年、第一章参照（原著E. Cassirer, *An Essay On Man—An introduction to a philosophy of human culture*, 1944）。
- (31) 新潮社版、トーマス・マン全集第八巻、一九七二年、六五七ページ、佐藤晃一訳「掟」。ほんの少し訳文に手を入れた。
- (32) ヘッシエル『人間を探し求める神』二七〇ページ参照。
- (33) E. Fromme, *La conception de l'homme chez Marx*, Frederick Ungar, 1961, p.81. および小山晃佑『神学と暴力』（教文館より二〇〇九年四月刊行予定）の講演集参照。
- (34) ヘッシエル『人間を探し求める神』四二二—四二三ページ。
- (35) 同上書二七〇ページ。